

も書きてブンゴメと呼べり。此の邑名はもと名田より起れりといへれば、大衆目も大衆名にて、是も名田ならんか。閑田耕筆に、阿波國祖谷山の邊深山谷に村里多し。村といふことを名といへり。其の所にて然るべき者を名主と呼べり。東大寺の古文書に、村を名といふことあるにかなへりといへり。されば大衆名は神宮寺の僧衆の名主なる故ならんか。

○大衆免村

明暦二年八月朔日利常卿の村印書に、河北郡大衆免村一ヶ村草高三百六拾七石免七つ一步。と載せ給へり。但し改作に於ての村印高也。また此の村は、昔舊藩二世利常卿の後室玉泉院殿の御化粧料なり。卯辰妙泰寺由來書に、備前中納言殿の姫君をば、玉泉院殿養育し給ふ處、元和元年に逝去、當寺境内に御葬送、御墳墓被築置。其の由縁に依りて、玉泉院殿の御知行所大衆免村領の内二段分、當寺居屋敷に拜領被仰付、御印頂戴仕。とあり。扱此の村地は追々町地と成り、村高減少すといへり。年代摘要に、享保十五年町續家數、頭振大衆免村十五軒。とありて、此の時世頃にも

多く町地となりたるにや。

○大衆免町

元祿九年の地子町肝煎裁許付に、大衆目町とあり。今大衆免中町と稱する町などを、いにしへ大衆免町と呼びたりけん。

○飴屋某傳話

續漸得雜記に云ふ。金澤大衆目町に家居する飴屋某は、金澤にて飴細工の鼻祖也。此の者若き頃は甚だ放蕩にて、家事を不<sub>レ</sub>治得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>埒者なりしかど、後江戸へ出で漂泊する内に、飴細工を習ひ、人形花鳥等の品々を飴にて拵へ、子供の慰物となしけるに、流行して産業を得、師匠よりも細工道具等も貰請け、今は心易く渡世も相成るに付き、師匠へ暇を乞ひ、金澤へ戻らんと、古郷への旅立をなしけり。頃は九月の末なりけるが、北陸道へ赴き、既に越後路を経て歌驛へ懸りしに夜に入り、殊に深更におよび、獨旅といひ、秋の夜の人跡たえたる寂寥たるものすごき夜道といへども、元來大膽不敵のものなれば、小歌うたひ歩み行く内、風と向うに蹲り居るものあり。ぶきびながら近寄り見れ

ば、十七・八許の僧素肌にてかゞみ居たり。餘りいぶかしく様子を尋ねければ、關東へ下る旅僧なるが、盜賊の爲に衣類悉くはがれたり。されど是則因縁のしからしむる處、更に驚くべきにあらずとて自若したり。飴や其禪機活達の氣象を感心し、我荷物の内より着替の木綿わた入を取出し、先づ是にて寒さを凌がれよと與へければ、旅僧も深く歡喜し、去れど堅く固辭すといへども、強て着せしめ、同道して次の驛へ懸りし頃は、夜も明けぬれば、其驛にてまた古衣を買得て與へけり。彼出家甚だ其厚恩を拜謝して別れけり。飴屋は夫より程なく金澤へ歸着し、後大衆目邊に小家を買ひ求め、彼飴細工を産業とし、チャルメラを吹き、初て市中を賣りありきけるが、市中にて珍敷事とて、子共殊に賞翫なしたり。然るに其後三十年許をも経たりけん、金澤武藏が辻に飴細工をなし商ひ居ける折、小立野天徳院の和尚通行せられしが、此飴屋をば見とめ、駕籠脇の僧して、右飴屋の名前住所を尋ねさせ通られける處、其翌朝右飴屋が宅へ、天徳院より使來り、用事有<sub>レ</sub>之間寺へ可參旨申來る。甚不<sub>レ</sub>審ながら、飴屋は破れ袴着用して、追付き

罷越、案内を乞ひけるに、其段方丈へ達しければ、居間へ可參とて役僧誘引す。飴屋は次の間に平伏しけるに、和尚挨拶ありて、さて其方は愚僧を見覚えなきやと問はれけり。飴屋頭をあげ、面体を見、更に覺無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>山申上げ、り。成程年限も餘程相立、今にては見忘れたるも尤なり。さらば可<sub>レ</sub>申聞。其方三十年許以前、江戸より金澤へ赴きたる頃、途中夜に入り、歌驛にて盜難に逢ひし旅僧を救ひたりし事はなきやと問はれけり。飴屋承り、や、考へ、成程其儀は思ひ出し候。十七・八許の出家にて御座候と答へければ、和尚其旅僧こそ則我也。寔に其方の情に依りて勤學の功を積み、今かゝる大藩の御菩提所の住職と成りたるも、偏に其方の厚恩生々世々忘れず。何とぞ其方へ廻り逢ひたらば、此恩を謝せんと兼々心懸けしに、不思議の奇縁にて、今對面に及ぶ事満足にたへたりと、深く感涙に及ばれけり。さて此報恩には、其方何なりとも望の筋あらば腹藏なく申さるべし。幾重共計ふべしとのよし被<sub>レ</sub>申けり。飴屋承り、誠に案外至極の恩言と和尚の實意を感拜しけり。右飴屋は輕き者ながら、元來無<sub>レ</sub>欲者の一氣性ありし者なれ